

いつの日にか・・・と心待ちにしていた日がついにやってきた。

私の心の中にずっと沈んでいた青い湖・・・深く心に刻まれていたはずの思い出の風景は、雑多な日本の生活の中で思い起こすにはあまりにも現実感がないものだった。仕事に追われ、日常に埋もれて、時が経つにつれ希薄になっていく思い出は、いつしか空想の出来事だったような気さえし始めていた。氷河を頂く岩山に囲まれた、宝石の輝きを持つ湖なんて本当にあったのだろうか・・・？ それを確かめに行ける日がついにやってきたのだ。

昨日の夕暮れには泣きたいような気持ちで走り回っていた林の道を、今日は思いがけず道中を共にする事になった学生グループ達とにぎやかに語り合いながらウキウキと辿っていた。

私は季節があと一ヶ月早ければ、この辺りは一面に可憐な高山植物の花園になっているのだとくどいほどに繰り返しながら、天候に恵まれてさえいれば目の前に聳えているはずの央邁勇^{ヤンマイヨン}が見えないことが残念でたまらなかった。まるで自分がネイチャーガイドにでもなっているような気分、この土地の美しさを訪れる人達に少しでも多く知ってもらいたい気持ちでいっぱいだったのだ。

昨日ウィンが座り込んでいた花園広場を過ぎるとそれまで続いていた林は途切れ、岩の上を乗り越えながら歩く崖下の道に変わった。朝日に照らされて大勢の仲間とにぎやかに歩いていると、昨日は風に揺れるタルチョがまるで魔境への入り口を示す道標のように薄気味悪く感じられ、不安に締め付けられながらこの道を走っていた事が嘘のようだ。

歩く速度と同じ速さでゆるやかに移り変わってゆく景色を楽しみながら歩を進めると、央邁勇に近づくにつれて徐々に風景が迫力を増してくる。すると唐突に奥の湿原が眼下に広がる崖の上で道は終わってしまうのだ。湿原を挟んだ対岸は既に央邁勇の裾野にあたり、氷河から岩肌を伝い流れ落ちてくる滝が目の前でザワザワと音を立てていた。

「うわぁ～、綺麗な場所だなぁ～！」一緒に歩いていた青年が歓声を上げた。みんなが声を上げてこの土地の美しさを褒める言葉を聞いていると、私は自分の故郷でもないくせに、「そうでしょう～」となんだか得意気な気分になったが、しかし内心不満だった。

「でも、本当はもっともっと綺麗なよ～！！もし、雲が無ければあそこに雪山がどーんと聳えているの！一ヶ

月前だったら、この湿原は花がいっぱいなよ！！」

言っても仕方の無い事だとは判っているが、どうしても言わずにはいられない。何度言っても言い足りない気分だ。せめて昨日の夕暮れに私が見た央邁勇^{ヤンマイヨン}の風景を彼らに伝えたいと思ったが、自然の美しさを言葉で伝えようとしたところで、それは実際に見た者にしか判らないことだ。私がおせっかいな口を挟まなくとも、青年達は目の前に広がる亜丁の自然を十分楽しんでいるようだった。

道の切れた所から低い崖を下り湿原に降りると、所々ズブズブになっている場所には丸太や木の枝が転がしてあった。その上を綱渡りのようにそろそろと歩きながら湿原を横切れるようになっているのは三年前とまったく変わっていない。

「みんな気をつけて！！もし落ちたらドロドロよ～！！」

湿原を目の前にして、私は必要以上に張り切っていた。実はこの旅の目的地が亜丁に定まった時から、この瞬間が来るのをずっと心待ちにしていた理由があったのだ。

ウィンや学生達がバランスを崩したり足をすべらせたりして泥の中に足を突っ込み、靴の中に水が入ったなどとキャアキャア騒いでいるのを尻目に、私は平然と靴が泥にとられるのも省みずズブズブの泥の中をくるぶしまで泥水に漬かりながらスイスイと歩いた。あぁ～快感！！そんな私の姿を見た青年の一人が声をかけて来た。

「君の靴は水がしみないのかい？」

「私の靴は防水の登山靴だから、こんな場所を歩いても全然問題ないの」

内心の得意満面の気分を隠すと私は平然とそう答えた。

三年前にこの湿原を渡った時の思い出が胸の中に甦る。あの頃の私はアウトドア用の靴も知識も持ち合わせておらず、亜丁に来るのにも踵が高くスタイルが良く見えるように作られた、街用のおしゃれスニーカーを履いて来ていたのだ。安定も悪く、滑り止めなど効いていないタウンシューズでヨロケながら泥の中に足を突っ込んで靴下が濡れたと悲鳴をあげている私の脇を、案内人の烏里氏が平然とザバザバ歩いているのを見た私は、先程の青年と全く同じ質問をしたものだ。

たまたま機会が得られていなかっただけで元々はアウトドア志向の好みを持つ私は、そこで烏里氏の防水の利いたトレッキングシューズにいたく感銘を受けると、自分もあんな靴を手に入れてやろうと、その時密かに決意を固めていたのだ。

亜丁から戻ると再び都会型の生活にうずもれていた私に、トレッキングシューズ購入の機会はなかなか訪れなかったが、翌年急に富士山に登る気になった。

夏が来るたびにアウトドア系の雑誌で約束事のように組まれる富士登山の特集を本屋で立ち読みしていた私は、しっかりと広告主の策略にはまり、富士登山に向けてのトレッキングシューズが紹介されているページに強く興味を引かれていた。

シーズンともなれば小学生でもソロソロ登山に行く富士山に、特に靴など準備する必要はなかなかなかったろうが、普通のスニーカーさえまともに持っていなかった私は雑誌で紹介されていた手頃な価格のトレッキングシューズに心をひかれ、自宅の近所にあった登山用品店に足を運んでみたのだ。初めて訪れた店の中で、思いがけず値段もデザインも様々な登山靴の棚を目の前にしばし途方にくれていると、白髪頭の店員がぶっさら棒な調子で声をかけて来た。

「靴ってのは目的によって全然違うんだよ。あんた何処に行くつもりなの!？」

「富士山に」

「富士山に行くためだけなら別にこんな靴買う必要ないよ」

「これから他の山にも行ってみたいと思っているから」

「他ってどこに？」

「さあ、まだ判らないけど・・・湿原とか。この辺まで水に浸かっても平気な靴が欲しいの」

私は、これだけは譲れないといった調子でくるぶしの辺りを指差して見せた。脳裏には亜丁の湿原の風景が広がっていた。

「何処に行くか判らないんじゃ、しょうがねえなあ・・・」

白髪頭の店員は私のささやかな希望には全く取り合わない調子で苦笑すると、

「じゃ、とりあえずこの辺のを履いてみな」

と棚に並んでいた中から取り出した靴を放り出すように私に差し出した。

店の店員というよりは「口の悪い山のオヤジ」といった雰囲気だった。毒舌ながらも愛情が感じられる物言いには親しみが感じられ、私は学校の先生に叱られる様にしながら何足もの登山靴を試履し、2時間近くもかけてやっと一足の登山靴を選び出したのだ。お手頃な金額で適当な一足を購入するつもりだったトレッキングシューズは、いつの間にかオヤジの口車に乗せられたのか、当初の予算を大幅にオーバーした本格的な登山靴に変わり、私にはだいぶ高い買い物になったのだが妙に嬉しかった。

思いがけずに購入してしまった高価な一足は、履かなきゃ損だとばかりに日本最高峰の富士山で勢いづいた私は、その二ヵ月後に旅行で訪れたマレーシアで東南アジア

の最高峰であるキナバル山(標高 4,095.2m)に登った。ボルネオ島のジャングルトレッキングで岩をよじ登り、鍾乳洞を這いずり、ぬかるんだ熱帯雨林気候の森の中を歩き回った時は、つくづくこの靴を買っておいて良かったと思ったものだ。

しかしなぜだか日本の山には何処に行ってもよいのか判らずにいて、一年近く寝かせて置いた登山靴を久しぶりに引っ張り出してきたのが今回の旅のきっかけとなった、私の登山歴史上最高峰の大姑娘(標高5025m)だ。出番の回数でいえばまだまだ少なくとも、高さだけは高い山を渡り歩いてきた私の登山靴だったが、購入の際に目的地として唯一イメージしていたのはこの亜丁の湿原だった。

何の計画も無く、勢いだけでやって来た今回の亜丁だが、結果的にはこの場所を歩くために買った靴を履いて、この湿原に帰ってくる事ができた訳なのだった。私は靴が汚れるのも厭わずに、半ばわざと泥に浸かるような歩き方をしながら、改めてずっと願っていた亜丁再訪がなかった喜びをかみしめていた。

湿原を横切ると、そこからはいよいよ湖に至る登山の開始だ。前回の胸が張り裂けそうだった苦しさを思い返すと武者震いが出る思いがしたが、実際に登山してみると記憶にある苦しさとは比べ、さほどではない。やはり今回の旅で大姑娘山を先に体験しているために既に高度順応しているのだろう。体力にゆとりが持てる分だけ景色が良く見える。懐かしい記憶の通りに現れる風景や岩のひとつひとつに愛着が感じられた。

高度が上がり、山の樹木が途切れ始めたところから岩場の急登が始まる。この登山では一番苦しいところだが、私にとっては思い出の少年に励まされながら二人で登った懐かしい道だ。

昨日は宿探しのドタバタ劇で少し薄れていた少年との再会の感激が再び込み上げてきたが、フッとその感激に影をさすようなその他の出来事が胸をよぎる・・・この三年間、亜丁へ思いをはせる度に幾度彼の事を想ってきただろう。三年分成長した少年との再会は、思わず我を忘れる程に嬉しかった。でも・・・彼もこの村の人間である限り、他の村人達と同じように私達旅行者からはお金を得る事ばかり考えているのだろうか。私と並んで無邪気そうに笑っていた少年の笑顔が目に見えた。

あなたもそうなの・・・？

急登の岩道で無口になった私は、口の中で少年の名前を転がしながら一歩一歩岩を踏みしめて山を登った。

「到了～!!!」

山の頂上の入り口に辿り着いた時、私は両手を広げると叫び声をあげた。前回ここを訪れた時に横に並んでいた少年が、この場でそう叫んでいたのを思い出したのだ。

一緒に登ってきた学生軍団の青年達が歓声を上げ後ろを振り返ると「着いたぞ〜!!」と声を上げて後続の仲間に終点を知らせた。

懐かしい天国の湖は私の記憶の風景と何も変わってなかった。荒涼とした風景に囲まれて、氷河を頂く岩山から流れ落ちてくる細い滝に水の表を震わせて揺れている鮮やかな青い湖。

やっぱり幻なんかじゃなかったんだ・・・

だが本当に残念な事に、朝は日差しが射していたはずの空はいつの間にか湧いてきた雲に覆われて灰色に垂れ込めていた。

あの日の私が思わず息を飲み、呆然と立ち尽くして眺めた宝石の輝きを持つ湖は、牛奶海の水の色と太陽の光とが合わさって創りあげられた自然の芸術品だ。曇り空の下で眺めても鮮やかに青い牛奶海は十分に美しかったが、せっかくここまでやってきたウィンや学生達には、あの湖底から燐光を放って燃え上がる水色に、ダイヤモンドの欠片が散りばめられているような牛奶海を見せてあげたかった。

お願い、一瞬だけでもいいから日が射して・・・

祈りは天まで届かず、私の心の中に沈んでいた輝く宝石の湖は、やはり半分は幻のままだった。（続く）

